

毎日新聞社は、危険な行為として航空法に基づき国土交通省に報告、警視庁にも届け出た。

照射が三回続いた。後部座席右側には共同通信社のカメラマンも搭乗していたが、気付かなかった。

窓に色を付けるなどの対策も考えられるが、視界が悪くなる悪影響もあり、悩ましい問題だ。

発表した。保護事業で、放鳥トキから数えて三世代目の誕生は初めて。野生で生まれ育ったトキにひなが生

は放鳥トキに野生で育てられたトキは、昨年放鳥されていた。

いて親鳥に餌をねだる様子も観察された。順調に育てば六月上旬には巣立つとみられる。

# 食の大切さを広げたい

## 骨髄移植体験し実感



血液の病気「骨髄異形成症候群」と闘ったプロゴルファーで絵手紙作家の中溝裕子さん(画)が「骨髄バンク登録と命を支える食の大切さを広めたい」と、四月にNPO法人「食といのちのお結び隊」(東京都港区)を設立した。闘病中は食事を取れず点滴による栄養補給で命をつないだ中溝さん。退院後に食事ができる喜びを知った体験から「食べ物が持つ力を実感してほしい」と話している。(秦淳哉)

骨髄移植の闘病体験などを話すプロゴルファーの中溝裕子さん＝東京都千代田区で

中溝さんが突然の体調不良に見舞われたのはプロ三年目の一九九一年八月。体の倦怠感に加え微熱やせきが続き、病院で検査を受けた。告げられた病名は骨髄異形成症候群で、十万人に一人の病気だった。確実な治療法はなく多くは白血病に移行する。唯一効果的とされるのが骨髄移植による治療だ。

「闘に突き落とされた気がして人生が終わったと思った。しばらくは現実を受け入れられず、口数も減り『どうせ死ぬんだ』と部屋のふすまや本を破って、自暴自棄になった」。それでもクラブを握り続け、輸血を受けながら試合に参加した。ゴルフをする時だけは病気を忘れられたが、九五年のプレー中に倒れた。

## プロゴルファーがNPO設立

幸い妹の白血球の型が一致したため、九七年十二月に妹がドナーとなり骨髄移植を受けることができたが、移植後は拒絶反応に苦しみ、約二年八カ月間の入院生活を余儀なくされた。「新しい骨髄のリンパ球により口の中の粘膜が傷つけられ、痛くて食事を取れず水も飲めなかった」。点滴だけで一日八百四十キロの栄養を取って命をつないだが、アスリートの体とは思えないほどやせ細った。ようやく食べ物が喉を通ったのは移植手術の三年後。食べたのは母が作ったおかゆだった。「ご飯が喉を通った瞬間、食べ物をのみ込める感覚が戻って泣きました。食が命の源だと実感して、普通のご飯を食べられることがどんなに幸せか身に染みた」

徐々に体力が回復すると「一人でも多くの仲間を救いたい」と、骨髄バンク評議員としてドナー登録を呼び掛ける活動を開始。チャ

中溝さんは「命を大事にすることは食べることを大切にすることにもつながる。妹からもらった命でこの活動を広げたい」と話す。

NPOでは今後、廃棄対象となった農産物の加工販売を行ったり、販売期限切れ食品の二次利用活動をしている食品メーカーを支援したりすることを検討。市田柿の産地として知られる長野県高森町で木から落ちたまま放置される柿など、食といのちに関わる食品をウェブサイトで販売し、収益金の一部を「日本骨髄バンク」に寄付する。

十二日には千代田区麹町の弘済会館でNPO法人設立のつどいを開く。問い合わせは同法人＝電03(6721)9122＝へ。